SESSION HOUSE Annual Report 2012

２０１３年３月３１日発行

社会との接点を模索した一年

東北大震災と福島原発の事故から２年目、政治的にも経済的にも社会的にも混迷が続く2012年も、私たちにとって試練の年となった。その中でダンスを軸とした小劇場セッションハウスを担う私たちは、社会に向けてどのようなことを発信し続けることができるのか、その問いに対する答えを模索し続ける一年だったように思える。そうした不確実性の時代の中にあって、痛みも心地よさもダイレクトに感得できる“からだ”を基点としたダンスの持つ意味は小さくない。学校教育でダンスが取り上げられるようになったのも、そうした時代の要請があるからだろう。セッションハウスは1991年に開設してから2012年で21年目となったが、近年“ダンスで作るからだの未来”を合言葉に、さまざまなダンス公演やワークショップを実施、求められる問いへの答えを出し続けてきたように思う。その合言葉に即してこの一年を振り返ってみよう。

プログラム間・地域間の「連携」「連動」の充実化

3.11以来、人と人との繋がり、「絆」の大切さが再認識されるようになっているが、私たちも企画を考える時には一つの公演から次の公演へ、先輩から後輩へなど、個々別々に活動するだけでなく“からだの未来”に向けて広く「連携」、「連動」していくことに力点を置いてプログラムを組むようにしている。若手ダンサーたちの単独公演の制作をサポートする『D-zone』をリレー方式で多数回連続して実施し始めたことも、ダンサーたちに自分たちの活動を一つの流れの中にあることを意識してもらいたいとの考えに基づいている。また、近藤良平が芸術監督として毎年恒例となっている『リンゴ企画』においても、舞台経験豊富な中堅に加えて若手ダンサーを起用し続けていることも、「連携」や次世代への「連動・継承」を意識したものと言えるだろう。

リンゴ企画「ブルグミュラー25」

今年で11回目となった大学生ダンサーによる公演UDC（ユニバーシティ・ダンス・クロス）が、社会人になってもダンス活動を続ける者たちによって『UDCアフターズ』公演として定着してきたことも、出身校の違いを越えた「連携」と後輩へエールをおくる「連動・継承」を体現化するものとなってきている。

また、国内巡回公演を敢行したマドモアゼル・シネマは、山口県の岩国市では、地域の活性化を図っている市民フォーラムと「連携」しWSと公演を共同開催、予想を越え立ち見の出る盛況の中で、ダンスの魅力、面白さを伝える機会となった。また地元NPOの協力を得た福岡ではWS、公演ともにバレエ教室から来場者が多く、コンテンポラリーとバレエとのコラボレーションにダンスの可能性を発見したという声が聞かれたことも、ジャンルを越えた共同作業の成果と言えるだろう。

集中講座でワークショップの充実化

2012年は“からだ”の持つ魅力と可能性を多角的に探求していくために、ワークショップ（WS）の充実を図った。3月に５人の講師と受講生51名による公演『ダンス専科』を実施したのをはじめ、5月の連休に『神楽坂ダンス学校』、8月に『真夏のダンスキャンプ』と題した集中WSを行った。5月の『ダンス学校』は近藤良平校長の下、ダンサーと一般の人々を対象にバレエからコンテンポラリー、ヨガや気功、日本舞踊に至るまで、バリエーションに富んだプログラムを実施した。8月の『ダンスキャンプ』では、ドイツからジャン・サスポータスが来日、参加者と作品を創るWSを実施したのをはじめ、新進の若手ダンサー 4人が、自分の手法をアピールするWSを開講。その様子を公開するダンスプレゼンテーションで「からだの今」を観客と共に考え楽しむ時間を共有した。また1960年代から今日に至るまで、ダンスの第一線で活動し続けている笠井叡氏には5月、8月と連続して講師を務めてもらったが、「エネルギーは消費するものではなく、作り出していくものだ」とする氏独特の身体哲学に基づくWSは、参加者にとってダンスへの取り組み方を根底から考え直すインパクトの強いものとなった。

マドモアゼル・シネマ WS

「断絶」を乗り越えるための企画の充実化

私たちは「連携」や「連動」を意識して企画を進めているが、当然のことながら社会の動きと無縁ではいられない。先の総選挙の結果などを見ると、これからの社会のあり方についての意識もさまざまに分裂しており、人々は連携プレイや連帯意識の醸成からはほど遠い「断絶」とも言える状態が露呈してきている。3.11から二度目の春を迎えても、被災地の復興は遅々として進まず、放射能禍は延々と続いているにもかかわらず、人々の災禍への感度には大きな断絶＝温度差が生じてきているように思われる。少しでも被災地と「連携」しなければとの想いから、私たちは公演の際に“ちりつも作戦”と題して義援金を募り被災地へ送り続けてきた。そして2012年の春からは被災地に通い支援活動を続けている作家の渡辺一枝さんによるトークの会「福島の声を聞こう！」を随時開いている。これまでに5回開催し、毎回被災地からさまざまな立場のゲスト・スピーカーに来てもらい、過酷な事態に直面している方々ならではのお話を聞かせていただいている。記憶を風化させないためにも、他人事として矮小化しないためにも、継続していくことが肝心と思い実践している。

人材育成に特化した公演の充実

池野　惠（舞踊批評）

震災から一年。首都圏での舞台芸術活動は、前年の自粛ムードから一転して盛んに行われ、今この時を逃すまいとする観客の心理も働き、劇場には賑わいが戻ってきた。とりわけ舞踊の分野では、例年にも増して多くの公演が見られ、その中には「復興支援」と銘打ち、自らの公演活動を通じて社会との接点を持とうとする意識の高まりも感じられた。

そのような中でのセッションハウスの一年は、まず付属カンパニーのマドモアゼル・シネマが『つぐちゃんの空』『東京タンゴ』を上演。前者ではベテラン女優の大方斐紗子をゲストに迎え、過去から現在へと繋がる個人の記憶を共感をもって描き深い感動を呼んだ。劇中朗読された一般公募の作文が成功の一助となったことも画期的だった。劇場と観客を繋ぐ、こうした企画は今後も随時採り入れていってほしい。後者は、東京のほかに岩国、福岡で上演。再演を重ねてさらなる練り上げが期待される。近藤良平チームリーダーによる「リンゴ企画」は、年頭の「立体絵本」から秋の「とさか計画」へと移行。斎藤美音子、森下真樹ら際立ったキャラクターの参加により新鮮な息吹を伝えた。今後の展開を楽しみにしたい。

レジデンス・アーティストの笠井瑞丈、富野幸緒、平山素子、松本大樹は、それぞれ個人の持つ力を作品へと広げていく過程を丹念に見せて意欲的なプログラムだった。彼らに次ぐアーティストの発掘という意味では、D-Zone シリーズに登場の望月崇博率いるトップスターは、文字通り大きな可能性を秘めている。前半にD-Zone シリーズがリレー形式で 8 回連続して行われてきたのも新しい動きだ。このように、2012 年は人材の育成に特化した公演の充実が目立ち、そこから大きく飛躍する逸材が台頭してきたことが頼もしい。民間のスペースとして、この 20 年あまりの歳月を若いダンサーの支援に注ぎ込んできた成果が結実したと言えるだろう。

特筆すべきは、今年度から「セッション・ベスト賞」が制定され、企画プログラムの一つである 21 フェス・シリーズ 80 作品から選出された「ダンス花」vol.16 と 17 の 10 曲の中から 1 曲に贈られたことだろう。両回ともに厳選された内容で非常に見応えがあり、とくにソロ作品は個性の違いが明確で、それぞれ魅力に富んでいた。とりわけ中村蓉、柿崎麻莉子、中村理、奥野美和の 4 人は誰が受賞しても納得できる内容で、審査員の価値観の違いがそのまま投票に反映されることとなった。受賞した中村蓉については、若い女性の心理ドキュメントといった趣きで、日常のさりげないしぐさや音響効果等がうまく活かされていた。アクションを通じて内面や人間性を表現するという手法は、とりわけセッションハウスのカラーに合致していたと思われる。柿崎麻莉子については、狭いスペースを活かした空間の使い方とアイディアが巧みで、身体の強度が感じられた。彼女の魅惑的な容貌も作品の力を高めていたと言えよう。柿崎は、アンジェ国立振付センターの短期留学を経てバットシェバ・アンサンブルのオーディションに見事合格。8 月から単身イスラエルに向かう直前に、ST スポットとセッションハウスで笠井晴子とのデュオ、『La Vie en Rose』公演を打ち上げて行ったのが喜ばしい。中村理のアタッシェケースを用いたペーソスあふれるパフォーマンスも忘れ難い印象を残した。奥野美和は、映像や音響のあふれる空間に身体を投げ出し、それを際立たせるという高度な技とセンスで強烈なインパクトを与えた。今日的なダンスの可能性を示したという点で、もっとも新鮮かつ刺激的な内容で秀逸だった。上記 4 人のうち柿崎麻莉子は前述の通りバットシェバ・アンサンブルに入団、中村蓉は、横浜ダンスコレクション EX2013 コンペティション I の審査員賞とシビウ国際演劇祭賞を、奥野美和は同じく若手振付家のための在日フランス大使館賞と MASDANZA 賞を 2 人揃ってダブル受賞したのは快挙だった。コンペが若いアーティストのジャンピング・ボードとなり、コンテンポラリー・ダンスの活性化に繋がるのは喜ばしいかぎりだが、あくまでも通過点の一つであることは言うまでもない。継続的な公演活動に結びつくようなトライアウトやワークショップの場としての拠点の役割は、もっとも重要である。

奥野美和

公演の充実はもちろんのこと、こうした日々の積み重ねを重視したプログラムが今後ますます盛んになるよう期待したい。

2012 年 ダンスプログラムの軌跡

1 月	7 ～ 9 日	「リンゴ企画・近藤良平・立体絵本～やぎの一生」(5 回公演) 出演：近藤良平，成河、楠田健造、藤田善宏、笠井瑞丈、井神さゆり、笠井晴子、中村蓉ほか
	14 日	「シアター 21 フェス vol.89」
	21･22 日	「シアター 21 フェス Step Up vol.40」(2 回公演)
	28 日	「ダンス花 vol.15」(2 回公演) 出演：村上美寿希、高村裕貴、渋谷亘宏、恩田和恵、あきたけだ、古田島正子ほか
2 月	4･5 日	D-zone リレー① マグナム・マダム第二回公演「マダム爛漫」(3 回公演) 出演：山口夏絵，千裕、ノリエ・ハマナカ、花田雅美、長井江里奈ほか
	11 日	特別プログラム「トラルファマドリア」(2 回公演) 出演：イザベラ・フィレヴィンスカ（ポーランド）
	18 日	D-zone リレー② 永井美里 /AAPA「海を歩く」(2 回公演) 出演：永井美里ほか
	25 日	レジデンス・アーティスト・笠井瑞丈ソロ公演 「ラインを越えて」(1 回公演) 出演：笠井瑞丈（ダンス）、藤田佐和子（ピアノ）
3 月	3･4 日	University Dance Cross (3 回公演) 出演：11th「UP」14 大学 52 名
	10 日	D-zone リレー③ 「girigires, vol.2」(2 回公演) 出演：田上和佳奈、阿部早希、ほか
	24 日	D-zone リレー④ 村松利紗「追いかけて来る的」(2 回公演) 出演：村松利紗（ダンス）、吉関菜央（映像）
	25 日	「シアター 21 フェス vol.87-1」(1 回公演)
	31 日	「ダンス専科 2012」(2 回公演) 出演：伊藤直子・富野幸緒・坂東扇菊・平原慎太郎 松本大樹のワークショップ参加者 51 名
4 月	7･8 日	D-zone リレー⑤ COOKIECREAM「にせもの」(3 回公演) 出演：藤井咲恵、久保佳絵ほか
	21 日	「シアター 21 フェス Step Up vol.41」(2 回公演)
	22･28･29 日	尾本安代こどもバレエ発表会 (3 回公演)
	30 日	「シアター 21 フェス vol.87-2」(1 回公演)
5 月	3 ～ 6 日	神楽坂ダンス学校 講師：近藤良平、笠井叡、坂東扇菊、勝部ちこ、青田潤一、柳瀬真澄、蘇雷、KENTARO!!、井神さゆり、小笠原大輔、簑島桂、富野幸緒
	12 日	D-zone リレー⑥ PANDRA「ある一人の男の夢日記」(2 回公演) 出演：青剣、MARBO、深堀絵梨ほか
	19 日	D-zone リレー⑦ nobolabo「KOKO- ただここにいたいと･･･そんなきもちー」(2 回公演) 出演：登坂良樹、anna ほか
	26 日	D-zone リレー⑧ビルヂング「待ちわびるターン」(2 回公演) 出演：加藤沙希、アレックスほか
6 月	16 日	「ダンス花 vol.16」(2 回公演) 出演：中村蓉、愛知伸江、柿崎麻莉子、森政博、清藤美智子ほか
	23･24 日	マドモアゼル・シネマ「つぐちゃんの空」(3 回公演) 演出・振付：伊藤直子　ゲスト：大方斐紗子 出演：相原美紀、竹之下たまみ、大島菜央、佐々木さやか、佐藤郁、外園彩織 / 橋本礼
7 月	8 日	みんなのダンス・ショーイング 勝部ちこ、早川朋子、富野幸緒、近藤良平指導のワークショップ生
	14･15 日	「シアター 21 フェス vol.88」(2 回公演)
	21 日	「シアター 21 フェス Step Up vol.42」(2 回公演)
	27 日	コンサート「草原の風」(1 回公演) 出演：オット・ホンバイラ、バヤルト、佐久間順平ほか
8 月	3 日	「La vie en Rose」(1 回公演) 出演：笠井晴子、柿崎麻莉子
	19 日	真夏のダンスファイア第一夜 振付指導：ジャン・サスポータス
	26 日	真夏のダンスファイア第二夜 振付指導：ホナガユウコ、井田亜彩美、鯨井謙太鯤、大島菜央
9 月	1 日	UDC アフターズ「 7 年後の YELL 」(2 回公演) 出演：根岸良和ほか
	8 日	「カトルカールN°1～ラ・セゾン・デ・マロン～」(2 回公演) 出演：平田恵子、前納依里子、古田島正子、古里和歌子、板垣朝子ほか
	17･30 日	「シアター 21 フェス vol.89」(2 回公演)
	22 日	D-zone 古園井美果ソロ「あふれでる刻」(2 回公演)
10 月	2 ～ 8 日	マドモアゼル・シネマ巡回公演「東京タンゴ秋」 シンフォニア岩国、福岡イムズホール、セッションハウス (5 回公演) 振付・演出：伊藤直子 ゲスト：尾本安代、松本大樹　ピアノ：藤田佐和子 出演：相原美紀、竹之下たまみ、大島菜央、伊藤茉野、佐々木さやか、佐藤郁、外園彩織
	3･14 日	レジデンス・アーティスト公演 「ストロング･ストイック･ストロベリーショー vol.2」(3 回公演) 出演：富野幸緒、Rachel D' Amour ほか
	20 日	「シアター 21 フェス Step Up vol.43」(2 回公演)
	27･28 日	D-zone トップスター 2012「レディー 」(3 回公演) 出演：望月崇博ほか
11 月	3･4 日	リンゴ企画・神楽坂とさか計画 「ブルグミュラー 25」(3 回公演) 出演：近藤良平、斉藤美音子、森下真樹、広沢麻美 (p)、中村蓉、中村理、堀菜穂
	10 日	「シアター 21 フェス Step Up vol.44」(2 回公演)
	17 日	UDC アフターズ「ぱられタリウム」(2 回公演) 出演：竹森徳芳、井田亜彩実ほか
	23･24 日	レジデンス・アーティスト公演「世界へ！」(3 回公演) 出演：平山素子、松本大樹＆アンディ・ウォン、笠井瑞丈ほか
12 月	1･2 日	D-zone 小川麻子「allo・・・もしもし～」(3 回公演) 出演：小川麻子，池畑俊一ほか
	8 日	「ダンス花 vol.17」(2 回公演) 出演：haku x boku、奥野美和、中村理、～saku～、竹之下たまみ

第1回セッションベスト賞
中村蓉『別れの詩』が受賞

2012年、第1回のセッションベスト賞に中村蓉の『別れの詩』が選ばれた。この賞は1年間に上演されたノンセレクト公演「シアター 21フェス」シリーズの80作品の中からセレクトされた再演プログラムの「ダンス花」から選ばれるもの。6月公演の愛知伸江×永井由利子、柿崎麻莉子、清藤美智子、中村蓉、森政博、12月公演の奥野美和、咲〜saku〜、竹之下たまみ、hug×boku、中村理、以上の10作品が選考対象となった。

公演ごとの観客やスタッフの声を参考に審査員5名が最終審査を行い、決定した。審査員は池野惠(評論家)、近藤良平(振付家・ダンサー)、松本大樹(振付家・ダンサー)、伊藤孝(セッションハウス企画室代表)、伊藤直子(振付家・ダンスプログラム企画監修)で、甲乙つけがたい作品が並ぶ中で、どの点を選考のポイントとするのかによって審査員の意見は分かれた。意見交換を繰り返した結果、最終的には3対1対1で中村蓉の作品が受賞することとなった。

なお、この選考後に行われた「横浜ダンスコレクションEX2013」のコンペティションにおいて、中村蓉が審査員賞とシビウ国際演劇祭賞を、奥野美和が在日フランス大使館賞とMASDANZA賞を、いずれも「ダンス花」で踊った作品でダブル受賞するという快挙を成し遂げ、更なる飛躍が期待されている。

「セッションハウスには学生の頃からお世話になっており、今回の受賞は、家族にほめられたような嬉しさがあります。と同時に『これから、がんばりなさいよ』と背中を押された気分です。うっかり忘れてしまう大事なことを、ふと思い出せるような踊りを、これからもつくっていきたいです。」
(中村蓉)

「選出の言葉」 審査員を代表して

伊藤直子

コンテンポラリーダンスの「賞」の設定は、セッションハウス20年の歴史ではじめての試みです。多様性が魅力のこの分野の選考にあたっては、最終的には

1)小スペースの特徴を生かし、観客との連帯感など他者に開かれた作品
2)独自の表現を探し表出している作品
3)ダンスの強度、独特の身体性で見せる作品

の3点を勘案し、特にセッションハウスの特徴としての1)2)を選考の基準として重視いたしました。

授賞作品　中村蓉『別れの詩』は、誰にでもわかる言葉(映画)をもちい、独自性を道具の使用で見せ、個人史的になりやすいソロダンスを楽しい客観性のあるダンスとして見せました。意表をつく道具の使い方で、親子の物語を一人で展開させながらも説明過多にならず、踊るからだは十分に強度を備え、見るものの共感を得たと考えます。そして、審査員の私たちにとって、選考対象となったどのダンサーにも成長の過程が見られ、それぞれの表現の発展を感じられたことが一番の喜びでした。

コンテンポラリーダンスの良さは競争になく、一人に絞ることが難しく審査員一同、意を決して絞り込みましたが、視点や基準を変えるとどの作品が授賞しても不思議はありません。未来の方向性も多種多様だった10作品のダンスが、これからもっと社会にうったえ、世界に広がる原動力になることを信じています。

マドモアゼル・シネマ
「異」なるものとの共同作業で新たな地平へ旅を開始

2012年、マドモアゼル・シネマは、「異」なるものとの共同作業による表現領域を拡大し、「旅するダンス」の新たな出発点となった。

6月、演劇界の百戦錬磨の舞台経験を持つ大方斐紗子を迎え、亡き幼子たちへのオマージュとも言える新作「つぐちゃんの空」を上演、公募で選んだ作文などの朗読や語りをまじえての演技とダンスとの世代を越えたコラボレーションで、ダンス・シアターの手法を一段と深化させることが出来た。振付の伊藤直子は、この作品を創るモチベーションには、福島出身の大方斐紗子と橋本礼が参加したこともあって、東北大震災の被災者への哀悼の意も込められていたと語っている。

そして10月にはレパートリー作品の「東京タンゴ」で、岩国と福岡、東京と巡回する公演を実施した。この作品は2011年12月にバレリーナの尾本安代と男性ダンサーの松本大樹をゲストに迎え上演したバージョンを届けたものだが、こうした巡回公演は、それぞれの地域の市民団体やNPO組織などが地元の広報や制作をサポートしてくれてこそ成り立つもの。とりわけ岩国は美術作家の原田文明氏をはじめさまざまな職業の市民がフォーラムを結成して広報活動を展開し、200席余りの会場に急遽桟敷席を設けて250人もの観客で賑わった。そして女性ばかりの舞踊団に異ジャンルと異性が加わっての童話仕立ての作品に、「初めてこのようなダンスを見ました。均整のとれた身体、動きの良さに感動！また来て下さい」といった声が多く寄せられた。また岩国、福岡ともに公演前にレパートリーWSを行い、フィナーレで参加者が舞台に上がりダンサーと一緒に踊ってもらったことは、観客に作品を体験してもらう恰好の機会となった。

フレネポジマとは何か

笠井　叡

神楽坂ダンス学校のWS講師を勤めていただいている笠井叡氏から、からだを作っていく時に何が大切なことなのか、氏がその基本と考える「フレネポジマ」について寄稿していただいた。

今年の一月から二月にかけて、フランスのいくつかの都市をツアー公演し、その折に、ワークショップとか、さまざまな若いダンサーの活動の場に接する機会があり、非常に興味深い経験をしたので、始めにそのことを述べてみたいと思います。ひとつはかつてＣＮＤＣ(国立現代舞踊センター)のディレクターをやっていたエマニュエル・ユインの作品を、若い人たちが再演するための練習場にいたときのことです。ガラス窓を通して、街の風景や屋根や空に浮かぶ白い雲が見える広い部屋の中に、沢山の机を持ち込み、その机の上下を使って、十五名程のダンサーが動いていました。

大まかな構成が与えられている中で、ダンサーたちが思い思いの動きをしているのを見ているうちに、ある瞬間、空間がからりと変わって、それまで、「ダンスの動き」しか見えなかった空間の中に、ダンサーの動きだけではなく、ガラスを通して見える木々や雲、建物の壁、いや視界に入る街全体が、ダンサーと同じくらいの質量もって、何かを語り始めたのです。

すでに風景は風景ではなく、建物は建物ではなく、何というのか宇宙的な生命の流れの中に全体が解けあっていました。私は踊りを見ているというよりも、新しい世界の断片の中に、入り込んでいるように思えました。十五名ほどのダンサーは踊り以前の、動きが生まれる原点で、ただ生きているとしか言いようのない孤独の時間を呼吸している、「小さな魚」でした。もちろん、動いている当の本人達にそのような意識はなく、ひたすら構成の中で、夢中に動いていただけだと思います。そのあと、なぜあのような新しい空間が流れ出たのか、いろいろ考えました。例えば秤があったときに、秤のメモリは、そこに重さを載せれば必然的に、動きます。メモリの動きは、重さを載せたことの結果であるに過ぎません。私たちはしばしば踊るときに重さを載せることをしないで、針を直接動かそうとする場合があります。ダンスはダンス以前の無数の試みや仲間との会話や人間関係の渦や、要するにダンス以外のところで、カラダの中に、無意識のうちに溜めこまれたエッセンスのようなものが岩盤の重みとなったときに、ゆっくりとメモリの針は動き始めるのでしょう。

昨年、神楽坂ダンス学校を引き受けたときに、この「ダンスにとっての重さ」とは何なのか、というテーマで、ワークショップを行いました。この重さということは、ダンサーとしてというよりも、人間として今の時代を生き、呼吸し、この時代と格闘しつつ、それら日々感じた事の総体だと思います。要するにダンスの重みとは、生きていることそのものであるには違いありません。けれども、このワークショップでは、このダンスという秤の針を動かす「重み」とは一体何か、を意識するための時間でした。

すでにこの「重み」は、ワークショップが始まる前に、「カラダをつくる四ヶ条」という、ややマニュアル化された形で、提出されておりました。それは一言で「フレネポジマ」という言葉です。

「フレ」は仲間、友達、友人。

「エネ」は生きる力としての「発声力」。

「ポジ」は肯定力。ポジティヴ性。

「イマ」はイマジネーション。

自分がこれまでダンスを続けてこられたのは、「友達」がいたからです。また動物たちの心の中を「イメージ」することで力が出てきました。そして、否定的な状況を否定するよりも、それを「肯定する」ことで、それを乗り越えたのだと思います。一人で居る時には、踊る以前に、声にならない声で言いたいことを、カラダの中で「絶叫」していたと思います。

「フレネポジマ」は私にとっては、踊りのためというよりも、この時代を生きていくうえでの、原点だと感じています。この地球の、崩壊に向かって雪崩落ちていくような響きを、日々私達は聴かなければなりません。「人から告知される自分の罪」を、日々の糧としなければならない時代です。毎日、心の中が戦場です。そしてこの戦場で闘いながら、その戦いの「証し」として、ダンスやっているのだろうと思います。

「ブルグミュラー 25」を踊る
近藤良平の新たな挑戦

2012年の「リンゴ企画」は、昨年までの「山羊シリーズ」から「神楽坂とさか計画」と名称を変えるとともに、ピアノの教則本として知られるブルグミュラーの25の練習曲全曲をダンス化するという新たな試みに挑戦。11月に舞台経験豊富なダンサー 3人と若手ダンサー 3人が生ピアノで、25プラス2のシーンで多彩なダンス風景を創り出した。この試みは音楽関係者からも注目をあび、取材依頼が飛び込む出来事もあった。この企画がどのようにして立案されたのか、芸術監督の近藤良平に語ってもらった。

Q：「ブルグミュラー 25」全曲をダンスにしてしまおうという企画は意表を突くものでしたけど、どんなところからこの発想が出てきたのですか？

K：発想というか、ピアノを習っている人は皆教則本として接しているもので、ぼくも子どもの頃に練習していました。ダンスを始めたのは20歳以降ですけど、多分その頃から何となくいつかブルグミュラーでダンスが出来たらいいなと思っていました。今回25曲全曲をやりましたけど、セッションハウスでも1997年か98年にコンドルズの作品の中でも2分ぐらいやったことがあるんですよ。ですからぼくの中では、いつかやるべきことの一つだったんです。ショパンとかドビッシーとかは情緒的ですけど、ブルグミュラーは何かふざけているようなところがある。あんまり情緒的だと音楽に持っていかれてしまうけど、全般的に音がウタタ、ウタタ、チャランチャランと、ブルグミュラーの曲は結構たんたんとしているというか、ただの情景描写っていう雰囲気があるので、いじってもいいかなっていうところがある。

Q：子供の時に練習曲としてやったものを、弾いている時に既に何かダンス的なものを感じてはいたということでしょうか？

K：それは最近意識的に気づいたことですけど、子どもの頃ピアノを弾く時にただ曲を奏でるのではなくて、体で感じるというか、もう椅子がいらないぐらい音って楽しいなと思ったことを覚えてますね。

Q：ある種ブルグミュラーは音楽の原点であり、ダンスの原点でもあると・・・。

K：もしかするとそうかも知れません。ちょっと前までは南米にいたので南米のフォルクローレとか自分も好きだし、そこにルーツがあるのかなと思っていたんですけど、もしかするとブルグミュラーかも知れない。

Q：そう考えると「リンゴ企画」をずっとやってきて、いつかはブルグミュラーはやるべき必然性があったのかなと？

K：「リンゴ企画」でもコンドルズでもそうなんですけど、基本的には僕たち芝居の人間ではないので脚本があって、ああだこうだというのはなかなかやらないので、一つのブルグミュラーという題材をやるっていうのも新しい試みだなあと思います。いつかやってみようと思いつつ、そのタイミングがやってきたっていう感じかな。でも意外と25曲全部やるっていうのは怖いし、手ごわいし、難しい。

Q：一つ一つの曲はそんなに長くはないわけですから、あれだけのシーンを創り込んでいくっていうのは大変な作業ですね。

K：もう意地ですね。25シーン作るというのは。手ごわいけど面白くて、実際にタイトルも「せきれい」とか「川の流れ」とか素敵な題名がついているのを全部シーンの名前を変えています。「ストーカー」とか変なものに。やっていて分かったんですけど、曲自体は具象じゃないけれど、川の流れっぽい曲とかは抽象に近い。「ショッピング」といって作ったりするところは、具象的でちょっとマイムぽっくなったりするんですけど、いっぱい並べていくと、中には抽象舞踊っぽいのが入ってたり、スローなお能みたいなのもあったり、いろんなこと出てくる。多分全部が同じようにパントマイムみたいに並べたとしたら面白くないかも知れません。それでいろんな舞踊の使い方をするというように結果的にはなりました。

Q：先日も良平さんがブルグミュラー協会の人からインタビュー受けたり、音楽関係者にも今回の「リンゴ企画」を見て新たに気づいたことがあったようですね。

K：そうみたいですね。僕たちはコンテンポラリー・ダンスの人間なので、発想を遊ぶということしますけれど、音楽の世界って特にクラシックの部類、1800年代の作曲家のものとかだと、多分要求が決まっているんですよ。例えばなだらかな曲だとなだらかにしなくちゃいけないですからね。楽譜に全部速度まで書いてある。ルールというか、これはこういうふうにすべしと決まっているので、その世界を描くことに必死になるというか、固定概念がある。ぼくはそういうのを全く無視しているので、スピードを変えるというより捉え方を変えているので、音楽だけやっている人にはとてつもなくビックリなんですね。そんな解釈って考えられないという。そこを面白いと思ってくれたようです。

Q：そういう意味では革命的なことをやったと言えるかも知れない。

K：ちっちゃなことですけど、意外と面白い試みだったなと。あともうひとつ思ったのは、ブルグミュラーは小品集で、僕は小さい時から親しんできた曲で全部暗譜しているので、音が分かってすぐに踊れる。ダンスは音じゃあなくて動きから作ることが多いけど、これに関しては音から作る自信がある。スタッカートの音、タンタンとか、音に忠実とはいえないんですけど、踊りにしていける。それはもしかしたら教材的なものにもなるかなと思いながら今回25曲全部やりましたけど、例えば中学校でこれで踊りを作るとなったら出来ると思う。ブルグミュラーのこの曲には接している人多いし、それを題材にしてダンスの教材にしてしまうこともできるかなと思う。いま学校でダンスが教科に入れられたから、提案してみようかな。音楽の先生なら誰でも弾けるわけですから。

Q：良平さんはこの作品の再演を考えているようですが、それはもっと違ったものが作れるという思いがあるからですか？

K：そういう思いもあるし、何か25曲もやると一冊の辞書みたいなものを作ったような感覚がある。一つまとまったものが出来た。普段あまりそういう感覚はないので作りっぱなしが多い。25のセットのこういうものが出来ましたという、一つのレパートリーみたいなものですね。こういう方法があるというか、新しい古典を作っているようなものですね。それを作り変えるにしても発展させるためにも、再演的な方法をとるのもいいかなと。一年ぐらい経つと、直したいところもいっぱい出てくるかも知れないしね。

Q：こういうやり方について、ダンサーの受け止め方はどうでしたか？

K：この曲テンポ早くて実は難しいんですよ。小器用に体が反応しないと、タダタダタンと終わっちゃう。そこに応えられるメンバーだったので良かったです。後は何役もこなすという、その切り替えが出来るかどうか難しい作業です。ぱっと終わって雰囲気変えなくちゃいけないしね。今回は皆意外と顔で踊れる人たちで面白かったなあ。ブルグミュラーは子供の頃からやっていて、ダンス的だなあと感じてはいましたけど、実は彼はダンスのためにこの曲を作ったのではないかと、この間やっていて思いましたね。タイトルにも「アラベスク」とか「タランテラ」とか舞曲のタイトルが結構付いている。そういうのがタイトルについているのは、もう舞踊のためって思っちゃいますね。フランス語の原題にはそうついているんです。

Q：そうするとブルグミュラー自身がダンスをイメージしていたと？

K：その可能性は十分ある。彼がそうはっきりは言っているわけではないらしいけど、その辺りのことは研究中のようですよ。彼には他に舞踊のための曲が残っているらしい。ただブルグミュラーの25の練習曲はピアノの練習曲として残ったみたい。でも元がよく分かっていないし、誰が練習曲と言い出したか分かっていない。

Q：けっこうミステリアスな人ですね。

K：そうそうミステリアスなんですよ。その頃お茶会みたいなところで多分BGMのようにピアノを弾いていた可能性ありますよ。仕事として、同じものを何度も弾く。そういうとこから生まれた曲じゃないかな。だからラウンジなんかでお茶を飲んで踊っていた人がいたかも知れない。そして調子にのってブルグミュラーが場を盛り上げていたとか、想像すると面白いですよ。弟の方が有名で、もっと天才肌で有名な曲を残している。ブルグミュラー本人はいっぱい曲を作ったけど、センスのない曲をいっぱい作ったって言われている。アーティスチックではない。だからショパンとかドビッシーみたいに有名にはならなかったんですよ。

トップレベルの振付家が結集
レジデンス・アーティスト3人の競演

2012年のレジデンス・アーティストの公演は「世界へ！」と題して11月23日、24日の2日間、3公演が行われ、平山素子、松本大樹、笠井瑞丈の振付作品による競演となった。

平山素子は筑波大学で後進の指導に携わるかたわら、国内外でソロ活動や振付活動を精力的に展開するとともに、美術家や音楽家とのコラボレーションにも力を注いでいる。今回は、花道家の河村敦子の舞台美術が設えられた舞台で、オペラの名作「椿姫」をモチーフにしたソロ作品『camelias』を踊り、観客を魅了した。

平山素子

松本大樹は2005年より香港のダンサー、アンディ・ウォンとの10年間にわたって毎年新作を創作する企画「Dance Forest 樹林の舞」を続けており、その8年目となる作品を発表、深化の過程を如実に示す場となった。笠井瑞丈はこれまでにもレジデンス・アーティストとして、父親の笠井叡との共演やソロ公演をしてきたが、今回は20代の若手ダンサー 4人と共に、身体表現の可能性のさまざまを探る実験的ともいえる作品を発表した。

このレジデンス・アーティスト・プロジェクトは2004年以来実施しているものだが、現在は文化庁の助成を得て“トップレベルの舞台芸術創造事業”として行われており、2012年は以上の「世界へ！」の他には笠井瑞丈が2月にソロ公演、富野幸緒が10月に4人のダンサーと共に公演を実施、進化し続ける姿を見せてくれた。

イスラエルからの手紙

柿崎麻莉子

ダンス界の名門バットシェバ・ダンス・カンパニーのアンサンブルのオーディションに合格し、現在イスラエルで活動している柿崎麻莉子さんから、編集部に手紙が寄せられました。いまなお騒乱状態が続く国からのレポートからは、いま私たちがダンスすることの意味を問う真摯な姿勢が伝わってきます。

私は2012年8月より、イスラエルにあるBatsheva Dance Company Emsembleでダンサーとして働いています。それまでは東京でアルバイトをしながら踊っていました。初めてのカンパニー所属が、初めての海外生活ということで、カルチャーショックを受けながら日々を過ごしています。

現在Batsheva Emsembleでは14人のダンサーが働いており、そのうち10名がイスラエル人。他の4名はアメリカ、スペイン、日本出身のダンサーです。平均年齢21歳のヤングチームで、リハーサルでは英語を使用します。しかしメンバーの大半がイスラエル人のため、会話が盛り上がるとヘブライ語にすり替わってしまうことがよくあります。この状況は海外勢にはたまりません。私は英語もまだまだ勉強中ですが、ヘブライ語よりはマシなので、海外勢にまじって「What?!」「English!」と叫ぶ、そんな毎日です。

仕事は平日の10：00～17：00で、週末はオフです。イスラエルには徴兵制があり女性は18～20歳の2年間、男性は18～21歳の3年間は軍で働かなければなりません。アンサンブルにも高校を出たばかりの年代のダンサーが多くいます。彼らは優秀なアーティストとして特別待遇を受けているものの、それでもカンパニー前後は軍隊の仕事をしています。6：00～9：00軍隊、10：00～17：00カンパニー、18：00～21：00軍隊という、ハードな生活を続けているダンサーもいます。

本番回数は月によって違いますが、最近は週に2,3回の本番があります。その大半を占めているのが学校パフォーマンスです。学校パフォーマンスの日は、朝6：00頃に集合し、みんなでバスに乗り込みます。イスラエルは6時間もあれば北から南まで行けてしまうサイズの国。早朝のぼんやりした頭のままバスに乗り込み、うとうとしながらイスラエル国内をまわります。学校パフォーマンスに対する子供たちの反応は様々です。作品中も「なにその動き？！」と突っ込んでは笑い、お気に入りのダンサーを見つけたら携帯で写真を撮ろうとします。漫才かアイドルでも見ているかのようで、誰も「アートを観る態度」ではありません。唯一のアジア人である私には、「ヘブライ語わかる？何人？ニーハオ？」と声をかけられます。一度「日本人だよ」と答えようものなら、そのあと一気に10個くらい質問を浴びなければなりません。（パフォーマンス中なのに！）終演後には子供たちが写真を撮りに近寄ってきます。「なんていうダンスだったの？また踊りにくる？」と興味津々で話しかけられるたびに、「あー、いいなぁ」と思います。学校パフォーマンスでは小中高と様々な学校へ、時にはアラブ系の学校へもパフォーマンスをしに行きます。このイスラエルで、お客さんの宗派を選ばずにパフォーマンスできること、そしてダンスを見る機会が多くの子供たちに軽やかに与えられている状況を、羨ましいなぁと感じます。

2012年11月にはイギリスツアーがありました。当時、パレスチナ自治区とイスラエルの関係が悪化しており、アラブ系移民の多いイギリスでのツアーはボイコットにあうだろうとツアー前から噂されていました。結局、一か月のツアー、全16回の本番のうちプロテスターが現れなかった回はありませんでした。劇場の外にはプロテスターが集まり、劇場に入っていく観客に対し「そのチケットは汚れている！」と非難の声をあげ、チケットを買って劇場内に入ったプロテスターは作品中に「パレスチナを解放しろ！」と叫びました。そして、プロテスターが叫びだすと他の観客はその声がダンサーに聞こえないように、その声を掻き消すような拍手をしました。そのようなことが一カ月続き、私は多くの出来事をイスラエルから来たダンサーとして経験しました。日本にいる時、社会との繋がりがみえなくて不安になったこともあったのに、このように勝手に社会の方が繋がってくることもあるんだ、と驚きました。平和ボケの私には苦しい時間で、初めてのイギリスで何を観光したのか、何を食べたのか、ほとんど記憶にありません。長い歴史と国家の事情が絡まって現状があり、それぞれの立場の悲しみがある。プロテスターを責める気分にもならず、イギリスの空みたいに鬱々と過ごしていました。ツアー中盤のある日、もう作品も終わるという頃に、舞台に程近い客席で人が立ち上がる気配がしました。この日も数名のプロテスターがいたので、まだいたかとビクつきながら顔を上げると、そこには顔を真っ赤にして拍手をしている目のキラキラした少年がいました。その少年をみた時に、救われたような、紐がスルスルほどけていくような感じがしました。それから「抗議をするために劇場に来たプロテスターが、ダンスを観て、続きが気になって、抗議するのを忘れてしまうようなダンスをしよう」と思うようになりました。ダンスはお客さんを選ばない。だからこそ宗教も歴史も越えて、個人的な体験として、別の立場の人と繋がり、共感できる可能性がある。それは、小さいけれど未来に向かう一歩になるかもしれないと考えたのです。

海外でのダンサー生活一年目、言語も環境も変わって苦しむことも多いです。しかし同時に好奇心が膨らんでいくのを感じます。知らないことばかりで知りたいことばかり。ダンスのことも社会のことも、ここに来なければ考えなかったであろうことを、いまこの場所から見えるものを、しっかり受けとめていきたいです。

ＵＤＣ 11th

坂東扇菊 ＷＳ

平原慎太郎 ＷＳ

ビルヂング

2012年の記録

hug x boku

ＵＤＣアフターズ
（振付：竹森徳芳・井田亜彩実）

竹之下たまみ

中村 理

イザベラ・フィルヴィンスカ

柿崎麻莉子

松本大樹＆アンディ･ウォン

咲～saku～

笠井瑞丈

ダンス・プログラムを支えたセッションハウス企画室スタッフ

照明：関根有紀子、石関美穂、加藤　泉、鈴村　淳、菊池伸枝、関矢幸恵、久津美太地 ／ 音響：上田道崇、相川　貴、郡山純一 ／ 舞台監督：関根一郎、十亀脩之介、外園彩織、鍋島峻介
映像：瀧島弘義　／ 美術：若尾久仁子／衣裳：原田松野／企画監修：伊藤直子 ／ 制作：伊藤 孝、鍋島敬子、佐々木清子、鍋島峻介
会場スタッフ：佐々木さやか、徳永梓、新堀佳奈、竹之下たまみ、伊藤茉野

ダンス・プログラムを支える団体

文化庁、日本芸術文化振興会、EU・ジャパンフェスト日本委員会、ハニカム基金

ガーデン活動報告

セッションハウス2Fギャラリー【ガーデン】は、2012年も自主企画・共同企画の他、レンタルの展覧会、演劇公演、トークの会、クロッキー会など幅広い活動の場として活用された。

自主及び共同企画の軌跡

1月19日〜28日	大きな夢・小さな絵展(T)
2月18日〜27日	石田貞雄展「埋む風景」(T)
5月10日〜19日	大畑博嗣展(T)
5月21日〜30日	やまんばアート・ビエンナーレ「かたル」
6月14日〜23日	チャリティーアート展(T)
7月11日〜16日	パリ祭に寄せたアート展「巴里の詩」(T)
9月 7日〜16日	工藤洋子展「thermometer」(T)
9月18日〜27日	中村眞弥子展「絵巻の森の物語」(T)
10月10日〜19日	石丸のり子展(T)
10月31日〜11月10日	田島直樹銅版画展「増殖装置」
10月21日〜29日	WARABE 2012
12月 1日〜 5日	Noel展(T)

※渡辺一枝トークの会「福島の声を聞こう！」は、3/7・6/5・9/28・9/28 の4回にわたり開催

※(T)印は演劇美術社・豊田紀雄氏との共同企画によるもの

田島直樹銅版画展

2012年の美術展としては、自由美術所属の長い画歴を持つ石田貞雄の個展をはじめ、中堅から若手までギャラリーの空間性を生かした展覧会が相次いだ。中でも中村眞弥子は壁一面に絵巻物状のモノクロームの大作を展示、ポーランド・クラコフの国際版画トリエンナーレで受賞したばかりの田島直樹は、制作途中で産み出されるステートを生かして変容していく版画の可能性に挑戦する展示で目を引いた。グループ展として女性作家6人によって結成された“やまんばビエンナーレ”が展覧会のあり方に一石を投じるものとして注目された。会場には、平面から立体まで彼女らの多様な作品とともに、山のアトリエでの合宿で、福島の子供たちが描いた長大な作品も併せて展示された。それに加えてアートWSやダンスの会も実施され、単なる個人の表現域を越えて多くの人が出会い社会に向けて大きく開かれる場となった。

やまんばアート・ビエンナーレ

また、1996年の開始以来16年目となるダンサーをモデルとしたクロッキー会は2012年も20回開催された。これまで長年にわたって会を担ってきた丹野有美子に代って若手作家の吉田卓史が主宰を引き継ぎ、これまでのムービングのみだった会に随時、固定ポーズの会を導入するという変化もあった。

クロッキー会を主宰して

吉田卓史

セッションハウス・ダンス・クロッキー会も今年で17年目となりました。昨年(2012年)より、ダンス・クロッキー(ムービング)に加え、ひと月2回のうちの1回は5分、10分の固定クロッキーを入れ、2コマ実施することにしました。モデルは同じくダンサーの方です。

クロッキーは短時間で描くわけで、つまり短時間で選択をしないといけないということです。プロポーション、動きや、もっと絵画的な要素、線とか構図とか、あるいは印象やメンタルな部分。どこを見るか、どこを無視するかという選択です。

僕の場合はといいますと、今、自分が見ているその人を写したいといつも思いながら描いています。モデルになってくれるダンサーの方は、みんなそれぞれ当然だけれど、違った個性を持っているし、動きやカタチも違うわけです。僕はきれいな線をひきたいのではなく、それがその人のカタチの一部となって、はじめて生きるように感じます。それでもっとよく見ないといけないなと思い、固定のクロッキーを入れることにしたわけです。時には、あまり美しくて、描くというより、何かそれをなぞって、記憶しようとしている自分に気づいたりもしますが・・・。

このクロッキー会にはモデル台はありません。少し変わったクロッキー会と言えるかもしれませんが、ダンサーの方の呼吸、動いている時、止まっている時、あるいは、描く人と踊る人との間に生まれる緊張感なんかを、とてもリアルに感じとることができる空間になっていると思います。この空気をこれからも大切にしていきたいと思います。

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

昨年7月、広島で被爆したノンフィクション作家の織井青吾氏に誘われ、南太平洋の島テニアンに行って来た。太平洋戦争時に激戦で住民にも集団自決が強いられるなどの悲劇の末アメリカ軍に占領され、そこに作られた飛行場から日本の各都市への空襲や、広島・長崎に原爆を投下したB29爆撃機が出撃していった島である。今なお戦争の傷跡が色濃く残る島を歩きながら、少年時代に疎開していた広島郊外の町から原爆の閃光を目撃し、避難してきた被爆者に出会ったことが昨日のことのように蘇ってきた。そして今の自分のものの考え方の原点に、あの時代に体感したことがあることを改めて思い知らされた。折しも東北の被災地の人々の苦闘は続いており原発事故の傷跡は深まるばかり、テニアンでの体感は広島の焼け跡から被災地へ、そして福島へと一直線に連動していくものだった。

体感することの大切さ。バーチャル・リアリティが席巻している現在、ますますそのことの大切さに想いを致さずにいられない。人間は想像することのできる唯一の生き物と言われながらも、実際には愚挙は繰り返され、想像力の貧しさを露呈している。人それぞれ体感することは時代によって環境によって異なるのは当然としても、一人ひとりが原点となる体感を大切にして、世界を見ていくならば想像力は膨らんでいくはずである。渡辺一枝さんのトークの会に来たロックミュージシャンが、被災地に通い続けて自分事として考えるようになったと発言したことも、体感がもたらしたものだろう。そして、イスラエルから柿崎麻苅子さんが寄せてくれた手紙は、彼の地や旅公演の先で自分の目で見、体で感じたことから世界について、ダンスすることの意味について考える原点を確かめつつあることを如実に伝えるものだった。これらの営為の中にも一つの答えがあると言えるだろう。(T.I)

編　集：セッションハウス企画室（伊藤 孝、上田道崇）
写　真：伊藤 孝
発　行：〒162-0805 東京都新宿区矢来町１５８ セッションハウス
TEL.03-3266-0461　FAX.03-3266-0772　E-mail:mail@session-house.net
URL:www.session-house.net